

琉球大学学術リポジトリ

自律的学習につなげる中学校英語科単元・授業デザイン

-自己調整力を育む形成的アセスメントの活用を通して-

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2024-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狩俣, 智史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020307

自律的学習につなげる中学校英語科単元・授業デザイン

— 自己調整力を育む形成的アセスメントの活用を通して —

狩俣 智史

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・名護市立屋部中学校

1. テーマ設定の理由

9月の課題発見実習Ⅱにおける授業実践において、筆者は身につけたい資質・能力を明確にし、単元の終末に向けて帯活動や言語活動を毎時間設定し、スモールステップで資質・能力が育まれるよう単元や授業をデザインした。しかしながら、授業での学習活動が精選されていないため授業全体を通して振り返りの時間が十分に確保されず、生徒が自律的に学習に取り組む姿が少なく、学びが深まらない授業が展開されていた。筆者自身は生徒の振り返りの記述へフィードバックを与えることができず、生徒の自己評価を効果的に授業改善や学習改善へとつなげることができなかつた。田村(2018)は「学習活動をどのように終えるかによって、次の学習活動への意欲は大きく変わる」と、「振り返り」の重要性について述べている。丁寧な「振り返り」の実施により、学びのプロセスを俯瞰して自己変容への自覚が促され、自己調整力が育まれ、自律的な学びへとつながると考えられる。また単元の導入時にパフォーマンス課題の評価規準(ルーブリック)を生徒と共有して単元の学習を進めたが、生徒がルーブリックを意識して学習に取り組める工夫が足りなかつた。その結果、生徒が自らの学習状況を俯瞰して捉えきれず、自己の学習を調整して学びを深める授業とはかけ離れたものとなっていた。田村(2021)は、「確かな学習評価は、学習指導やカリキュラム編成における教師の行為を変え、その結果が成果となって子供の姿の変容に結び付く場合が多い。しかし、それだけではなく、子供自身が学習評価に参画することで子供の変容に向かうことも期待したい。」と述べている。教師が一方的に定めず、生徒と共に作成した評価規準をもとに生徒の自己評価や生徒同士の相互評価、教師からのフィードバックを通して自己調整力を働かせた学習改善を促すことも期待できる。その際、学習評価の中でも形成的アセスメントにおける「学習のための評価」や評価活動を学習の場とする「学習としての評価」を用いることに着目する。

以上を踏まえ、本研究では生徒の自律的学習につなげる単元・授業デザインの工夫として、生徒の自己調整力を育む形成的アセスメントの工夫に着目する。形成的アセスメントにおける「学習のための評価」や「学習としての評価」の活用を通して自己調整力を育成し、本研究テーマへ迫る。

2. 研究の目的

本研究では、自律的学習につなげる中学校英語科の単元・授業づくりを図る中で、形成的アセスメントを主とした自己評価や相互評価などの学習評価を工夫して活用することを通して、生徒の自己調整力育成の効果を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

- (1) 自己調整力の育成や学習評価、中学校英語科の授業づくりに関する先行研究や理論研究を行う。
- (2) 沖縄県A市立B中学校第2学年3学級在籍生徒99名(男子50名、女子49名)を対象とし、自律的学習につながる「自己調整力の育成」について検証するため計24時間の授業実践を行う。
- (3) OPP(One Page Portfolio)シートやワークシート等の記述及び成果物、授業後インタビュー及び質問紙調査(6件法)の結果等を活用して質的・量的分析を行う。

4. 自己調整力と形成的評価について

(1) 自律的学習につなげる「自己調整力」の育成

中学校英語科における学習指導を通して、自己調整力を育成し生涯に渡り自律的に学習する意欲や態度を育成することは重要である。伊藤(2009)は、「自己調整」を「学習者がメタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義している。二宮(2016)は、メタ認知能力について「子どもたちが学習主体、すなわち自律的な学習者として成長していくためには、メタ認知能力の育成が不可欠である。(中略)メタ認知能力を育成するためには、『評価活動』を学習成果の確認の場とするだけでなく、学習の場として位置づけ、そこへ子どもたちを主体的に参加させていく必要があることになる。」と述べ、学習評価を教師が一方的に行うだけでなく生徒自身が評価活動に加わることの意義について取り上げている。

(2) 生徒の学習改善につなげる形成的アセスメント活用の工夫

形成的アセスメントにおける「学習のための評価」や「学習としての評価」(表1参照)について、石井(2023)は『学習としての評価』は評価への子どもたちの参加や子どもたち自身の自己評価・相互評価を重視し、形成的評価を先述の自己調整学習者の育成につなげていこうとするもの」と述べている。また二宮(2021)が『学習のための評価』では、学習の主体は

表1 教育における評価活動の3つの目的(石井, 2015)

アプローチ	目的	準拠点	主な評価者	評価基準の位置づけ
学習の評価 (assessment of learning)	成績認定、卒業、進学などに関する判定(評定)	他の学習者や、学校・教師が設定した目標	教師	採点基準(妥当性、信頼性、実行可能性を担保すべく、限定的かつシンプルに考える。)
学習のための評価 (assessment for learning)	教師の教育活動に関する意思決定のための情報収集、それに基づく指導改善	学校・教師が設定した目標	教師	実践指針(同僚との間で長期的な見通しを共有できるように、客観的な評価には必ずしもこだわらず、指導上の有効性や同僚との共有可能性を重視する。)
学習としての評価 (assessment as learning)	学習者による自己の学習のモニターおよび、自己修正・自己調整(メタ認知)	学習者個々人が設定した目標や、学校・教師が設定した目標	学習者	自己評価のものさし(学習活動に内在する「善さ」(卓越性の判断基準)の中身を、教師と学習者が共有し、双方の「鑑識眼」(見る目)を鍛える。)

学習者であり、学習者自身が学習をふり返り、改善の見通しを持てるような評価活動であってこそ、評価は学習改善に結びつく」と述べている。本研究では、主に評価規準(ルーブリック)を用いて自己や他者の学習状況と照合し主体的に学習改善を図る場面を設定する。自己評価や相互評価の活動を通して、他者の振り返りやコメントから新たな気づきや学びが生まれ、自律的な学びにつながると考えている。

5. 授業の実際

(課題発見実習Ⅱ【後期】: 令和6年1月15~26日)

(1) 単元・授業デザインの工夫

本単元では地域の観光名所や特産物について紹介する観光パンフレットの作成をパフォーマンス課題とした。単元全体の学習活動がつながるよう学習内容を厳選し、単元の導入で観光パンフレットの評価規準を生徒と作成した。図1の学習指導案で示す通り、活動の振り返りや改善に時間を設けた。主に、導入時の振り返りの紹介、帯活動や終末の振り返り活動で形成的アセスメント活用の工夫を図った。

① 帯活動 (Small Talk → Writing)

帯活動では Small Talk (図2) を用いて単元を貫く課題の解決に向けた問いを与え、ペアを変えながら意見や考えを交流した。単元を貫く問いに対して、他者の意見や考えから学んだり、他者からアドバイスをもらうことで自己の学びを客

(3) 展開 (1単位時間で完結する授業の概観)

学習内容・活動	教師の手立て	評価規準(評価方法)
前時の振り返りの紹介	振り返りとペアからのコメントを紹介し、教師からのコメントを口頭で行う。	【中間評価】生徒から良い紹介文や改善できる点などを紹介してもらう。(学習としての評価)
Small Talk	Let's share your original travel pamphlets!!	
Writing	列でペアを変えながら前時に作成したパンフレットの紹介文を伝え合う。評価規準を提示し、相互評価を促す。Small Talk で交流した中で、書き直ししたり追加したりする文を書き出す。	
New Words	デジタル教科書を活用	
新出単語の発音と意味を練習しながら進める。	発音を確認し、生徒の反応が悪い時は再度確認して定着を図る。	
Listening with sentences	カード配布・デジタル教科書活用	
聞きながら本文を音声の順に並べ替える。	2、3回行い、達成具合を随時確認	
Reading (Chorus→2' 読み)	教科書活用し発音指導など机間支援	形成テストで内容理解の定着を図る。
内容確認問題	Google フォームズ活用	
7/7 形式問題で内容理解を図る。	即時解答設定をして、フィードバックを与える。	【評価規準: 5】読み手が考えたいくなるような問いかけを工夫して書いている。【10への手立て】前時までに書き留めた内容を参考にし、評書やドリット等活用して調べるよう支援する。
地域紹介クイズ作成	ブラウン先生が用いているクイズを参考に作成するよう声掛けをする。ペア等分らないものがあれば質問したり自分で調べたりするよう声掛けをする。	
Sharing	隣同士でクイズを出し合い、間違いや改善点がないか確かめ合う。	
振り返り記入	JCT活用し、授業で一番大切だと思うことと疑問点や感想など自由を記述してもらう。またペアからコメントやアドバイスをもらう。	【評価方法・場面】ワークシートの記述

図1 学習指導案

項目4では、モデル作品から評価規準を生徒と共に作成し、帯活動で常に評価情報を意識する助言を与えたことで増加したと考える。項目5では、帯活動や言語活動で自分の意見や考えについてペアを変えて交流する中で他者の意見や考えをモデリングしたことが増加の原因だと考えられる。

(3) 気になる生徒Aに対して取り組んだことと質問紙調査結果の考察

実習初日の授業観察を行った際、生徒Aは課題に取り組みながらも同じグループの友達と私語をする様子が授業全体を通して見られた。生徒Aにとって課題解決に向けた目的意識の高揚が課題であると捉えた。目的意識を高めるために、授業では「海外の中学生が読んで、どんなものか分かるように、もう少し詳しく書いてみよう。」など評価規準を口頭で示し、読み手の立場を意識する助言を通して生徒Aの取り組みにフィードバックを与えた。単元の導入時は単語レベルで紹介文を書いていたが、徐々に英文レベルで書くようになった。図6を見ると、複数の項目で授業後に高まりが見られた。学級全体と共通している点は、4、5の項目で増加が見られるように、上手く表現できない言葉を、プリントを見返して言語化しようと自己調整する姿が見られた。また授業を重ねるごとに生徒Aから課題解決の最中に解決方法についての質問が増えた。8の項目が大きく増加したことについて、生徒Aの積極的な質問に適切な助言を与えたことで、自己の学び方を見直し、課題解決を図ろうとする自律的学習態度の育成につながったと考える。

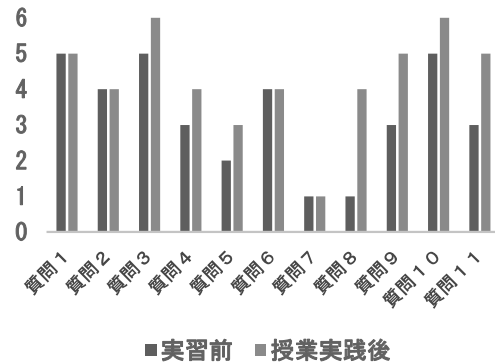


図6 生徒Aの質問紙調査結果

6. 今後の研究に向けて

今後の課題としては、項目6で否定的な回答の生徒が増えた点に着目した。学習改善や学習課題への意欲を持たせる工夫が不十分であったことが原因と推察する。石井(2020)は、「パフォーマンス評価のポイントの一つは、こうしたテスト以外の豊かで挑戦的な『見せ場』を教室に創出することにあります。」と述べていることから、生徒が責任感を持って本気で追求したくなるパフォーマンス課題設定の工夫や、単元・授業でヤマ場となる評価場面設定の工夫、自己の成長や変容を自覚できるOPPシートの活用を通して、生徒が自己の学びをより良くしようとする意欲が高められると考える。今後の研究においても継続して筆者自身の指導観や評価観、授業観などの「観を磨き」、自律的学習者としての素地を養うための単元や授業デザインが構築できるよう試行錯誤を重ねることで、教師としての資質・能力を高めたい。

引用文献

- 石井英真, 2020, 『授業づくりの深め方——「よい授業」をデザインするための5つのツボ』ミネルヴァ書房.
- 石井英真, 2023, 『中学校・高等学校 授業が変わる 学習評価深化論』図書文化社.
- 伊藤崇達, 2009, 『自己調整学習の成立過程——学主方略と動機づけの役割』北大路書房.
- 二宮衆, 2016, 「イギリスにおける『学習のための評価』による形成的評価の再構築」田中耕治編『グローバル化時代の教育評価改革』日本標準.
- 二宮衆, 2021, 「学習のための評価」「学習としての評価」西岡加名恵・石井英真編 2021『教育評価重要用語辞典』明治図書.
- 田村学, 2018, 『深い学び』東洋館出版社.
- 田村学, 2021, 『学習評価』東洋館出版社.